



人づくりの 農業

心 あ っ た か ニ ュ ー ス

農業経営に意欲的に取り組み、優れた功績をあげた農家や団体を表彰する「日本農業賞」の表彰式が開かれました。個別経営の部で大賞に輝いた「服部農園」は、服部忠さん(49)、都史子(50)さん(50)夫婦を大黒柱に、正社員十一人が農園を支える。評価されたのは、米づくり以上に力を入れる「人づくり」だった。服部農園は町内の水田面積の三分の一に当たる九十四ヘクタールを管理する。大半は後継者不足に悩む地主から、耕作を依頼された土地だ。服部さん夫婦が都史子さんの父靖宏さん(78)から農園を継いだのは二〇一四年。すぐに経営の難しさを知る。一つはこの年の米価の大暴落で、農園始まって以来の赤字となった。そしてもう一つが、一、二年で辞めてしまう社員たちだった。

休みもない。将来、子どもを育てていくには不安。社員たちはそう言って去って行った。忠さんは農園の基盤を整えるため経営研修に参加した。社員教育の重要性を教わり、特に「人件費

を削るのではなく、社員の能力を最大限に引き出すことが最優先事項だ」と考えるようになった。社員の就労環境の改善に取り組んだ結果、給料は民間企業の平均より多くなり、月の労働時間はほぼ二百時間までで収まるようになった。冬場の仕事を生み出すためキャベツやイチゴの栽培を導入する一方、農繁期でも月七日は休める体制をつくった。個々の社員にも農業経営を考えてもらうようにした。今では全社員が決算書を読み解く力を付け、経営の改善や提案をしてくれる。離職者がなくなり、求人は出していないが、うわさを聞いて「ここで働きたい」と若者が訪れるまでになった。妻の都史子さんは、一日も欠かさず交流サイト(SNS)で社員の奮闘を発信。農園のPRだけでなく、社員を送り出した親の安心感にもつながっている。一八年には、自分たちでつくった米を自分たちで売る「ハットリライスマーケット」を開業。米相場に左右されない価格で売れるようになり、経営の安定につながった。忠さんは二人でも多く経営感覚のある農業者を輩出すること、日本の農業に貢献したい。人材育成への挑戦はこれからも続けていきたい」と話している。

(中日新聞より)

個別経営の部」は経営・技術にすぐれ、地域社会の支持と共感を得ている個別経営」が表彰されます。主な審査基準は「立地条件を生かした合理的、安定的な経営である」「市場動向を的確にとらえ、消費者のニーズに応える農業を行なっている」「農業を通じて地域社会の活性化に貢献している」などです。

編集後記

私達の食を支えてくれている、農家さんの課題は本当に多いとききます。食をつくるのだから、若い人達が、やる気になるところが、未来の基盤になると思います。働く人を大切に、働く人が育っていくことは、本当に大事だと思います。人が育つということは、大切にしているということが多いことだと思えました。